

〈報告〉

箱根駅伝予選会における競技結果と TPI の関係

土屋大志郎*・金子今朝秋*・青木 和浩*

Relationship between performance in the Hakone Ekiden preliminary meet and Todai Personality Inventory (TPI)

Taishiro TSUCHIYA*, Kesatoki KANEKO*, Kazuhiro AOKI*

1. 緒 言

東京箱根間往復大学駅伝競走(以後:箱根駅伝)は注目度の高いスポーツ大会の一つと言える。しかし、箱根駅伝に出場ができるのは限られたランナーであり、毎年多くの学生ランナーが東京箱根間往復大学駅伝競走予選会(以後:箱根駅伝予選会)に出場している。しかし、箱根駅伝予選会のような大規模な大会では、不安や精神的なストレスが増加しやすいことから³⁾、実力を発揮できないことも考えられる。特に、箱根駅伝予選会においては数秒の差が予選通過と敗退を分けることも珍しくないため、身体的なトレーニングや調整と同様に、心理的側面から選手の実力発揮をサポートすることも必要であると考えられる。

選手の実力発揮は、ストレスや不安によって阻害されるとされている。しかし、これらの心理的要因の基盤にあるのは、選手のパーソナリティであり、その把握は心理的介入において重要視されている⁵⁾。スポーツ選手のパーソナリティ研究は、パーソナリティの概念が定義されて以降多く行われてきたが、テスト法の相違によって結果が異なり一貫した結論は得られておらず、有効なテスト法が求められている¹⁾。日本においては、より詳細にパーソナ

リティを捉えるためのテストとして Todai Personality Inventory (以後:TPI) が用いられている。TPIはカウンセリングや、多くの企業で人材教育や採用だけでなく、オリンピックに出場する陸上競技日本代表選手の自己分析などでも活用されている。しかし、蓄積されたデータはあるものの、それを用いたアスリートのパーソナリティ研究は少なく、実力発揮に対する影響との関連性の検討も行われていない。

以上のことから、本研究の目的は箱根駅伝予選会において、実力を発揮できた時と実力を発揮できなかった時の選手のパーソナリティの違いについて TPI を用いて検討することとし、これは箱根駅伝予選会に出場する選手の実力発揮をサポートする心理的介入の一資料となることが考えられる。

2. 方 法

(1) 研究対象

対象者は A 大学陸上競技部に所属し、箱根駅伝予選会に出場した選手26名とした。また、分析の対象は、山崎ら⁷⁾の研究によって大学生アスリートの TPI の結果は一カ月間で最大35.6%の変容がある事が確認されていることから、予選会に2回以上出場した同一人物の過去の TPI の結果であっても、TPI 実施回数分の結果をサンプルに含めた。そのため、分析は42のサンプルを対象に行い、実力発揮群と非実力発揮群の2群に分類した。

* 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科
Graduate School of Health and Sports Science,
Juntendo University

(2) 対象サンプルの分類

第85回～88回の各大会において、箱根駅伝予選会ゴールタイムをx軸、10000m申請タイムをy軸としたグラフに箱根駅伝予選会に出場した全選手の記録をプロットし、算出された回帰直線式によって導かれた記録推定値を基準として行い、推定値よりゴールタイムが速い19サンプルを「実力発揮群」とし、推定値よりゴールタイムが遅い23サンプルを「非実力発揮群」とした。

(3) 調査時期と手続き

TPIの実施はA大学陸上競技部の同意の上で行い、TPIインストラクターの指示のもと、口頭で説明あるいは文書で質問紙に関する概要と回答方法、留意点等を説明した。また、分析及びデータの使用はA大学陸上競技部の責任者と順天堂大学スポーツ健康科学研究科における倫理委員会により認可(院23-29号)を受けた上で行った。それに伴い、対象者は実名での情報公開などの不利益は一切ないことを確認していた。

(4) 質問項目

本研究で使用した質問紙の構成は、背景分析、思考過程分析、影響力分析の3つである。得点化は東大TPI研究会の了解を基に、出版元である株式会社人材開発情報センターにコンピューター解析を委託した。

また、質問項目は合計500問であり、回答時間は60～90分程度であった。

3. 結 果

(1) 背景分析について

背景分析によって示された実力発揮群と非実力発揮群の対人姿勢の相違を検討するため、対人姿勢ごとに χ_2 検定を行った。その結果、「自己肯定、他者否定」において、両群の差が有意であり($\chi_2=4.97$, $df=1$, $p<0.05$)、実力発揮群には「自己肯定、他者否定」の傾向が弱い者が多く、非実力発揮群には「自己肯定、他者否定」の傾向が強い者が多いことが示された。その他の下位尺度では相違がみられなかった。(図1)

(2) 思考過程分析について

思考過程分析によって示された実力発揮群と非実力発揮群の思考過程の相違を検討するため、 χ_2 検定を行った。その結果、思考の背後にある欲求における「自己の主義主張優先」($\chi_2=6.03$, $df=1$, $p<0.05$)、「他者からの理解を期待」($\chi_2=4.98$, $df=1$, $p<0.05$)、「他者からの親和を期待」($\chi_2=4.05$, $df=1$, $p<0.05$)において、両群の差が有意であった。このことから、実力発揮群には、思考の背後にある欲求として、「自己の主義主張」を優先する傾向が弱く、「他者からの理解を期待」する傾向と「他者からの親和を期待」する傾向は強い者が多いことが示された。一方、非実力発揮群には「自己の主義主張」優先する傾向が強く、「他者からの理解を期待」する傾向、「他者からの親和を期待」をする傾向は弱い者が多いことが示された。(図2～4)

(3) 影響力分析について

影響力分析によって示された、実力発揮群と非実力発揮群の行動特徴の相違を検討するため、 χ_2 検定を行った。その結果、行動特徴に有意な相違はみられなかった。

4. 考 察

(1) 実力発揮群の特徴

実力発揮群のパーソナリティ特徴には、チームワークや「和」を大切にしている特徴が多く示されている。非実力発揮群とは最も違いが見られたパーソナリティ特徴と言える。陸上競技は個人種目であるが、チームの合計タイムで競う箱根駅伝予選会はチームの戦術なども重要視されており、チームスポーツに近いと言える。そのため普通の大会以上に集団の意向に合わせることを求められることが多く、チームワークを大切にしている実力発揮群のパーソナリティ特徴は箱根駅伝予選会の特異な大会に適したものであると考えられる。またこのような外向的な性格特徴は特性論からみたスポーツマン的性格の特徴として多く報告されており競技水準の高いスポーツ選手の特徴とも報告されている²⁾。

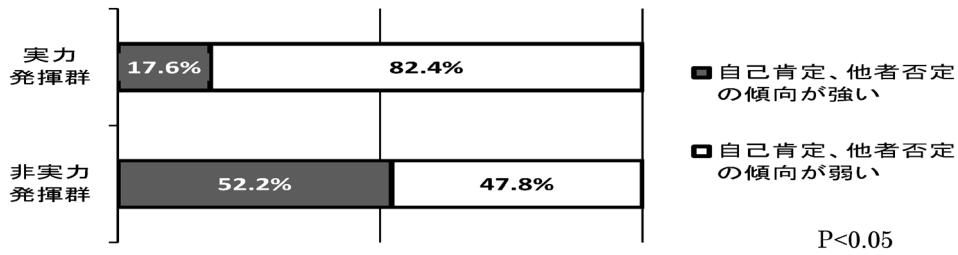


図1 半潜在意識における対人姿勢の相違

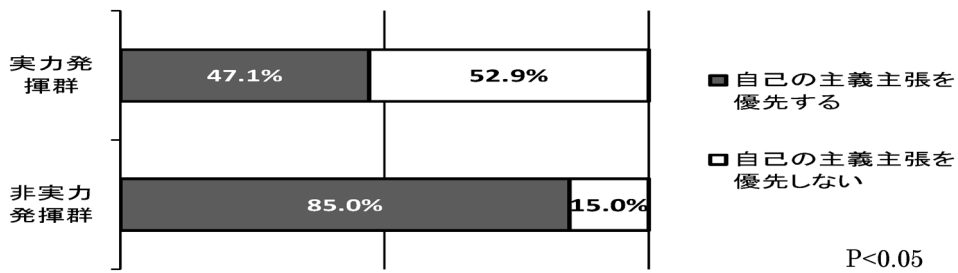


図2 「思考における自己主義の優先」の相違

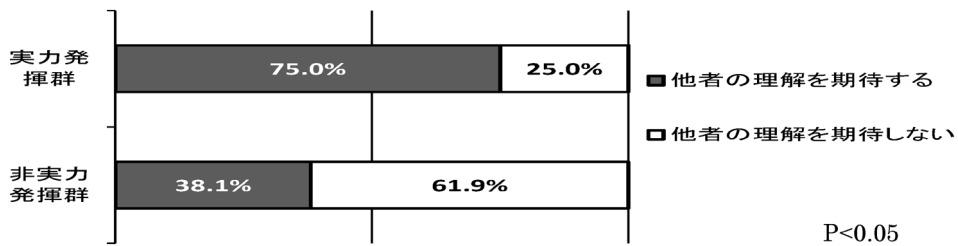


図3 「思考の背後にある欲求」における「他者の理解を期待」の相違

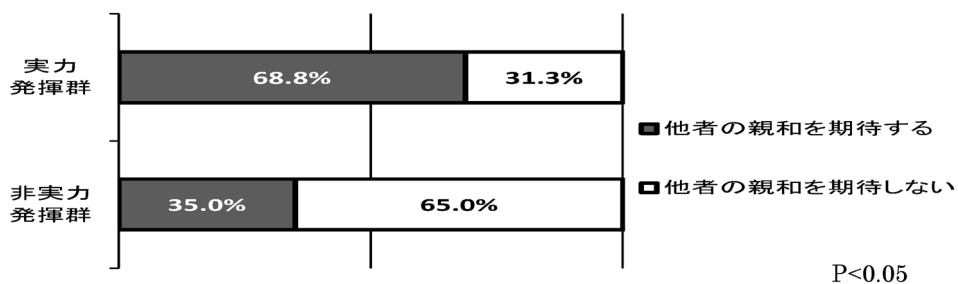


図4 「思考の背後にある欲求」における「他者の親和を期待」の相違

(2) 非実力発揮群の特徴

非実力発揮群の選手には、自己の考えや主張に自信を持つが、自分の考えは、最初から他者には理解されないと割り切っている傾向や、対人関係には距離を置き相互理解を深めることを求めている傾向

がみられた。このことから、非実力発揮は自己の考えを優先する個人志向性が高いことが考えられる。また、個人志向性が高い者は主体性や能動性が高いが、極度な自己中心主義や利己的な側面もある。そのため、ルールの順守を求められるスポーツ集団に

においては、個人志向性とは対の概念にあたる社会志向性が求められることが多く、普段の陸上競技大会以上にチームスポーツの要素が高い箱根駅伝予選会においては、より社会志向性が選手には求められていたことも考えられる。平井⁴⁾は自己の確立と相反して社会志向性が求められることで、ジレンマが生じ、このジレンマがストレスにつながる可能性を示唆している。さらに永井ら⁶⁾は精神的ストレスは箱根駅伝予選会における選手の実力発揮を阻害する心理的要因であることを明らかにしている。このことから、志向性のジレンマによって生じたストレスによって実力発揮が阻害されたと考えられる。

5. 結 論

箱根駅伝予選会において実力発揮した時の選手の多くは、半潜在意識において「自己肯定、他者否定」の対人姿勢をとらず、思考の背後にある欲求において「自己の主義主張」を優先せず、「他者からの理解を期待」し、「他者からの親和を期待」するパーソナリティ特徴を持つ。また、非発揮群はその逆の特徴を持つ。

(当論文は、平成23年度順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科の修士論文を基に作成されたもので

ある)

文 献

- 1) 阿江美恵子(2008). 競技心性. スポーツ心理学会(編著), スポーツ心理事典, 295-297
- 2) 荒木雅信(2011). これから学ぶスポーツ心理学. 大修館書店. 東京, 60-68
- 3) 橋本公雄, 徳永幹雄(2000). スポーツ競技におけるパフォーマンスを予測するための分析的枠組みの検討. 九州大学健康科学. 22, 121-128
- 4) 平井美佳(2000). 問題解決場面における自己と他者の調整. 教育心理学研究. 48(4), 462-472.
- 5) 梶原 慶, 武藤徹文, 松田 俊(2001). 資料 アスリートおよび非アスリートのパーソナリティパーソナリティ5因子モデルによる探索的調査. スポーツ心理学研究. 28(1), 57-66
- 6) 永井 純, 高井和夫, 渋谷俊浩(2003). 長距離走者の試合前における心理的ストレス. スポーツコーチング研究. 1(2).
- 7) 山崎正晴, 北村 薫, 竹内敏康(1997). TPIによるチーム力の測定—J大学女子バスケットボール部の事例—. 順天堂大学スポーツ健康科学研究. 1, 58-69.

(平成24年6月20日 受付)
(平成25年3月20日 受理)